おたふくかぜ(流行性耳下腺炎)に注意しましょう

おたふくかぜ（流行性耳下腺炎）は、子供に多くみられる感染症として知られています。2～3 週間（平均 18 日）の潜伏期を経て発熱を伴う、両側の耳下腺部（耳たぶからあごのライン）の腫れを特徴とし、ヒト→ヒトに唾液を介して感染（飛沫感染または接触感染）するウイルス性感染症（病原体はムンプスウイルス）です。

おたふくかぜは季節を問わず発生しますが、多くは冬から春頃にみられ、沖縄県全体ではおおむね 4 年周期パターン、約 2 年間の流行期と 2 年間の流行閑期がみられる特徴があります。

感染症発生動向調査※によると、県内における前回の流行期は、2004 年秋頃から徐々に患者数が増加し始め、2005 年 8 月から中南部を中心に流行、注意報が発令され、11 月以降になると流行は宮古地域にも広がりました。2006 年 5 月下旬に終息するまで県内での流行は約 10 ヶ月間続きました（図 1）。

過去の流行パターンから 2009 年には再びおたふくかぜの流行が予測されます。

おたふくかぜの予防には予防接種（弱毒生ワクチン、任意接種・有料）が有効です。予防接種 2～3 週間後に数%に軽度の耳下腺部が腫れたり、ごく稀に無菌性髄膜炎を発症（副反応）することがありますが、自然におたふくかぜにかかった場合と比べると症状は軽く済む場合が多いです。

予防接種を希望される方は医師と相談の上、接種するとよいでしょう。

※感染症発生動向調査・・・感染症法に規定された疾患の患者がどのくらい報告されたかを調査集計し、また過去のデータとの比較分析した情報を沖縄県感染症情報センターで公開しています。（http://www.idsc-okinawa.jp/）

【企画管理班】

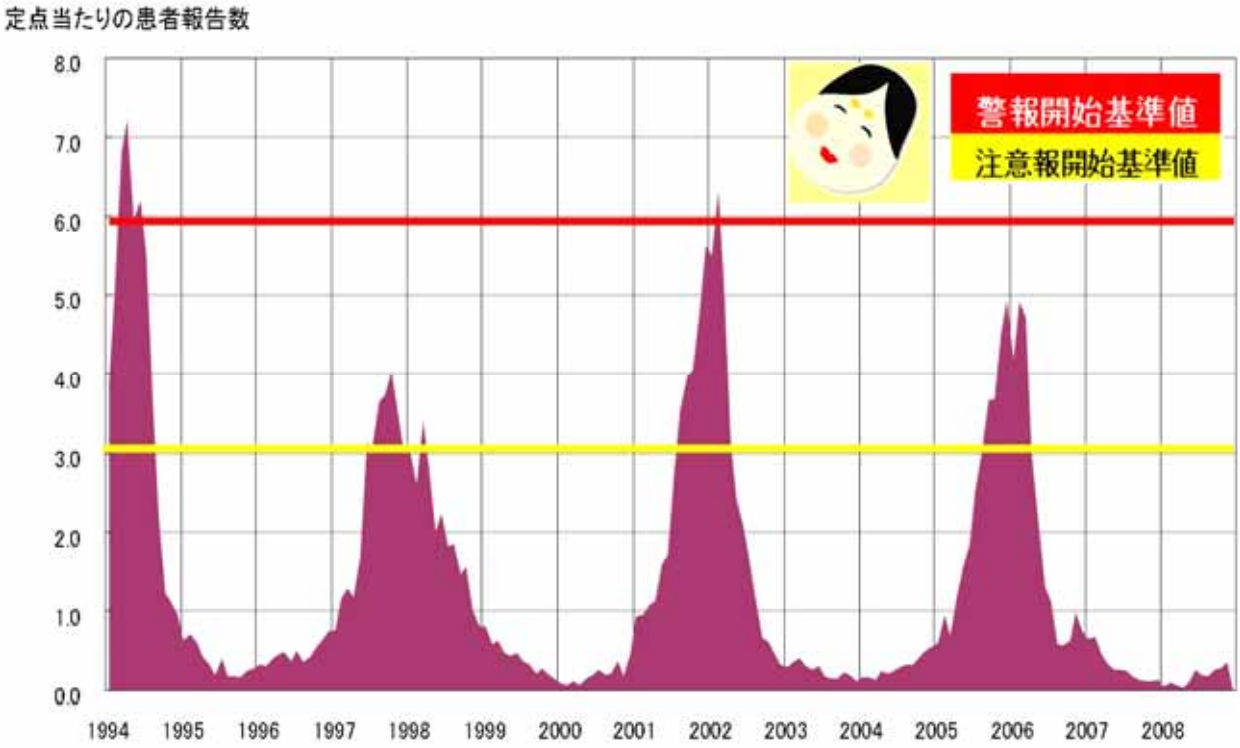

図１．　おたふくかぜの患者報告数（1994～2008 年）